

は し が き

本書は、2013（平成 25）年度から 2017（平成 29）年度までの 5 ヶ年にわたり交付を受けた科学研究費補助金基盤研究（S）「木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集」（課題番号 25220401）の研究成果報告書である。

奈良文化財研究所（以下、奈文研）では、PC普及以前から業務遂行上の必要性から木簡に関するデータベースの構築に取り組んできた。その後 1988・89 年に出土した長屋王家木簡・二条大路木簡の計 11 万点に及ぶ木簡の整理過程でそのデータベース化を行い、両者を統合する形で 1999 年に初めての木簡に関する総合的なデータベースとして「木簡データベース」を公開するに至った。しかし、増加する木簡の情報を充分にかつ効率よく抽出してこれを公開してゆくためには、データベースのさらなる充実とともに、私たちの行ってきた木簡に関する調査・研究のフローそのものの確認・再検討が必要になってきた。そこで、日本学術振興会の科学研究費の助成を仰ぎ、2003（平成 15）年度から 2007（平成 19）年度まで基盤研究（S）「推論機能を有する木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発」（以下、第Ⅰ期科研）を、続いて 2008（平成 20）年度から 2012（平成 24）年度までは基盤研究（S）「木簡など出土文字資料積読支援システムの高次化と総合的研究拠点データベースの構築」（以下、第Ⅱ期科研）を遂行してきた。

第Ⅰ期科研では、木簡積読支援システム「Mokkanshop」と文字画像データベース「木簡字典」という 2 つの研究ツールを開発し、第Ⅱ期科研では、「Mokkanshop」を高次化するとともに、周辺データベース群の充実を図った上で「木簡字典」と従来の「木簡データベース」とを統合して木簡に関する総合的拠点データベースを構築する方向付けを行うことができた。これらを受けた今回の研究は、a 現在も出土し続ける膨大な木簡資料の情報取得の効率化、b 木簡資料に関するさまざまな知の結集、c そしてそうして集められた木簡に関する情報や知を効率的に保管し活用するためのシステムの確立、これら 3 点を骨子として進め、これまでの研究の集大成を図ることとした。

本書は、本編、論考編、記録編で構成した。本編ではまず総論として研究の概要を紹介し、続いて特記すべき事項について、各論において詳述した。論考編では、まず本編に掲載した研究成果一覧の中から、特に重要と思われる本科研の成果に関する論考を選んで転載の形で掲載した。次に、本科研の研究成果に直接・間接に関わる成果として、研究分担者のみなさまにご執筆いただいた論考を掲載した。ご多忙のなか論考をお寄せいただいたみなさまに感謝申し上げます。記録編には、木簡ワークショップのテープ起こしを収録した。

3 期にわたる科研費による研究は、今回で一区切りの感が強いが、今後は構築した枠組みを利用し、データの質の向上や他機関との連携など、データの普遍化を目指していくこととなろう。幸いにも既にそのプロジェクトは新たな基盤研究（S）「木簡等の研究資源オープンデータ化を通じた参加誘発型研究スキーム確立による知の展開」（研究代表者：馬場基奈文研都城発掘調査部史料研究室長）の採択を受けて始動している。研究終了から本書の取りまとめまで、思わぬ時間を要することになってしまったが、忌憚のないご批正、ご教示を仰ぎ、既に発進している研究の礎とすることができれば幸いである。

末尾ながら、今回も研究の機会を与えられた独立行政法人日本学術振興会に対し、深甚の謝意を表す。

2019 年 3 月

研究代表者

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
副所長・都城発掘調査部副部長

渡辺 晃宏